

タイ語での代名詞代用表現・呼びかけ表現に関する考察¹

A Review of Studies of Pronoun Substitute and Address Term in the Thai Language

スニサー ウィッタヤーパンヤーノン (齋藤)

Sunisa Wittayapanyanon (Saito)

東京外国語大学世界言語社会教育センター
World Language and Society Education Centre,
Tokyo University of Foreign Studies

要旨

本研究では先行研究やタイ語話者を対象とした人称表現の使用意識調査の結果をもとに、代名詞代用表現と呼びかけ表現の機能的、形式的特徴を明らかにするとともに、関連するターミノロジーを再定義することを目的としている。人称代名詞以外で話し手や聞き手を指示する代名詞代用表現に相当するタイ語として新たに *kham theen bu-rüt sàp-pha-naam* を提唱している。代名詞代用表現には、親族名称や職業名称、名前などが使用されていることが確認されており、生起する位置は主語、目的語の位置となる。一方、聞き手を発話の伝達先として同定する呼びかけ表現に相当するタイ語を *kham riak bùk-khon* とすることを提唱している。呼びかけ表現は主語や目的語の役割は有しておらず、文頭や文末に生起し、対話者への注意喚起機能、再喚起機能を有している。

This study aims to clarify the characteristics of pronoun substitutes and address terms in Thai from functional and formal perspectives and propose revised definitions of related terminology by analyzing previous studies and results of a personal expression survey of Thai native speakers. The new term in Thai “*kham theen bu-rüt sàp-pha-naam*” is proposed as pronoun substitutes, which designate speakers and interlocutors, covering all words, except for personal pronouns, such as kin terms, occupation terms, and personal names etc. They occur in the position of the



subject or object. Another new term in Thai “kham riak bùk-khon” is also proposed as address terms that identify interlocutor as the message receiver. Address terms do not have the role of subject or object, but have the function of attention calling and re-calling to interlocutors at the beginning/end of a sentence.

キーワード：タイ語、代名詞代用表現、呼びかけ表現

Keywords: Thai Language, Pronoun Substitute, Address Term

はじめに

本稿は、先行研究やタイ語母語話者を対象とした人称表現の使用意識調査の結果をもとに、タイ語における代名詞代用表現(pronoun substitutes)と呼びかけ表現(address terms)の機能的、形式的特徴を考察し明らかにするとともに、関連するターミノロジーの再定義に関する提案を行い、今後、これらの研究を推進していくための基盤を整備することを目的とするものである。

筆者は 2018 年にタイ語母語話者 580 名を対象に人称表現に関する意識調査を実施したが、一人称、呼びかけ表現を含む二人称、三人称の全ての人称表現において、人称代名詞よりも代名詞代用表現がより多く選択されるケースが多数見られた (スニサー 2019a、2019b、2020、スニサー&富盛 印刷中)。代名詞代用表現とは、人称代名詞以外の語/句で話し手・聞き手を指示するものであり、タイ語では代名詞代用表現はごく自然にかつ頻繁に用いられている。しかしながら、タイ語での代名詞代用表現に関する考察は、代名詞もしくは人称代名詞の研究の一部として取り扱われているものが大半で、代名詞代用表現に焦点を当てた調査・研究は、これまであまりなされていなかった。そのため、研究者の間で関連用語の意味範囲に違いが見られるとともに、代名詞代用表現を意味するタイ語での適切な語彙は見当たらない状況である。

また、前述の 2018 年の調査では、二人称表現とは別に、聞き手を発話の伝達先として同定する語/句を指す呼びかけ表現に関する設問も設けて調査を実施したが、呼びかけ表現についても人称代名詞以外の語/句、つまりは代名詞代用表現が多用されているという結果が見られた(スニサー2019b)。

タイ語における呼びかけ表現は代名詞代用表現との重複も見られる一方、完全に一致

しているものでもない。例えば、職業名称である *khruu* 「(教職の)先生」や *mǎo* 「医師」は代名詞代用表現及び呼びかけ表現として、各語単体でも使用可能である²のに対して、*pha-yaa-baan* 「看護師」や *tam-rùat* 「警察官」は語単体では代名詞代用表現として使用可能であるものの、呼びかけ表現として使用する場合には、これらの職業名称の前に敬称となるタイトル *khun* を付加するのが一般的であり³、同じ職業名称でも違いがある。こうしたケースは、役職名称にも見られる。例えば、*?a-thí-kaan-bǎo-dii* 「学長」は、呼びかけ表現として使用する時は、短縮して *?a-thí-kaan* として使用することが多いが、特に立場が下の者が呼びかけ表現として使用する場合は *thâan ?a-thí-kaan khá?* としなくてはならない。*thâan* は前述の *khun* よりも高い敬意を示すタイトル、*khá?* は女性が使用する丁寧さを示す終結小辞となる。他にも目上の者へ使用する役職名称として *phûu-càt-kaan* 「マネージャー」や *hǔa-nâa* 「上司」といった語もあるが、代名詞代用表現と呼びかけ表現のいずれのケースでも各語単体で使用するのが一般的である。語自体が敬意の意を有する職業名称の *khruu* 「(教職の)先生」や *mǎo* 「医師」は(スニサー2019b)、呼びかけ表現の場合、語単体での使用法と敬称タイトル *khun* 付きの使用法のいずれも可能であるのに対し、*phûu-càt-kaan* 「マネージャー」や *hǔa-nâa* 「上司」といった役職名称は、立場が上の者への呼びかけ表現であるにも関わらず、敬意を示すタイトル *khun* を付加した形で使用することは稀である⁴。

タイ語での代名詞代用表現は人称表現として非常に重要な位置を占めているにも関わらず、そこに焦点が当てられた研究があまり見当たらないが、代名詞代用表現の考察を進めるに当たっては、代名詞代用表現と呼びかけ表現の共通性の点から、呼びかけ表現に関するこれまでの研究成果を援用できる可能性があること、さらには代名詞代用表現と呼びかけ表現は関連が深いにも関わらず、それらの機能的、形式的特徴における共通点や相違点等についての考察がまだ少ないため、代名詞代用表現と呼びかけ表現を同時に対象とすることで、多角的視点より、これら2つの用法・機能の特徴がより明らかに出来るものと考えている。

そのためには、まず先行研究を踏まえつつ、代名詞代用と呼びかけという用法・機能に関連するターミノロジーの意味範囲を明確にすることが必要と考える。さらには、2018年にスニサーが実施したタイ語母語話者を対象とした現代の人称表現、及び呼びかけ表現に関する使用意識調査結果(スニサー2019a、2019b、2020、スニサー&富盛 印刷中)と照らし合わせ、代名詞代用表現と呼びかけ表現の特徴をより明らかにしつつ、

今後の展望を示していくこととする。

なお、本稿内でのタイ文字及び発音記号表記のタイ語もしくは英語の後に、「」内で記した日本語訳は筆者訳となる。参照元のタイ語資料で英語訳が付されているものについて、タイ語発音記号表記の後に（）内で示している。一部のタイ語発音記号については、タイ文字の規則に則った表記ではなく、実際の対話で使用されている慣用発音の表記としている。また、本稿内に掲載した例文の中での代名詞代用表現、呼びかけ表現には下線を付加している。例文にはグロスとともに日本語訳も掲載しているが、タイ語の一部の代名詞代用表現、呼びかけ表現で直訳的な日本語にすると誤解を招く可能性があるものについては、日本語訳においてもタイ語のままとしている。そのため、(例2)、(例3)については、呼びかけ表現のみから構成される例文であるため、日本語訳は掲載していない。

I. タイ語での代名詞代用表現

本章ではまず代表的な先行研究の中から、代名詞代用表現に関連する用語を観察し、各語彙の意味範囲を比較検証するとともに、代名詞代用表現の機能的、形式的特徴を考察し、今後の課題となると思われる点も適宜抽出する。

1. 先行研究における関連語彙

タイ語学に関する項目が網羅的に記されている文献“way-yaa-koon thay” (Navavan 2016)では、kham theen「代名詞」の項目の中に関連する語彙を見出すことができる。kham theen「代名詞」は、表1で示した通り(1)kham bòk bu-rùt「人称表現」、(2)kham chíi-cha-phó?「指示代名詞」、(3)kham mây chíi-cha-phó?「不定代名詞」、(4)kham bòk cam-nuan「数量代名詞」、(5)kham bòk kaan-yêek「分割代名詞」、(6)kham bòk phûu-khâw-rûam「参加代名詞」の6グループに分類され、さらに(1) kham bòk bu-rùt「人称表現」は(1)-1 kham naam「名詞」と(1)-2 kham bòk bu-rùt「人称表現」の2グループに分類されている(表1参照)。

表 1 : kham theen 「代名詞」の分類⁵

分類区分		例
(1)kham bòk bu-rùt 「人称表現」	(1)-1 kham naam 「名詞」	a. 話し手/聞き手の名前 b. 話し手と聞き手の関係を示す語 (1)親族名称 phii 「兄/姉」、nóŋ 「弟/妹」など (2)他の関係 khruu 「先生」、sít 「教え子」など c. 聞き手の役職名称、話し手/聞き手の職業名称 (1)役職名称 hũa-nâa 「上司」など (2)職業名称 mêe-kháa 「女性の物売り」など
	(1)-2 kham bòk bu-rùt 「人称代名詞」	phôm 「一人称(男性)」、di-chán 「一人称(女性)」、 khun 「二人称」、phrá-ʔoŋ 「三人称(王様/王族)」など
(2)kham chíi-cha-phóʔ 「指示代名詞」	nii 「これ」、nân 「それ」、nôn 「あれ」	
(3)kham mây chíi-cha-phóʔ 「不定代名詞」	khray 「誰か」、ʔa-ray 「何か」、năy 「どれか」	
(4)kham bòk cam-nuan 「数量代名詞」	lúan 「全て」、súan 「部分」、bâaŋ 「多少」	
(5)kham bòk kaan-yêek 「分割代名詞」	tàaŋ 「それぞれ」	
(6)kham bòk phũu-khâw-rũam 「参加代名詞」	kan 「一緒に」	

(1) と(1)-2 では、意味範囲が異なるものの、同一語の kham bòk bu-rùt が用いられているが、具体例が示す通り、(1)-2 は「人称代名詞」の意味範囲を示している。一方、(1)-1 の kham naam 「名詞」は、人を指し示す語彙の中での名詞であるため、その意味範囲は、代名詞代用表現となる。但し、タイ語での kham naam 「名詞」だけでは、前後の文脈や説明なしでは、代名詞代用表現としての意味を示すことは出来ない。また、(1)-1 kham naam 「名詞」の意味範囲が代名詞代用表現と完全に一致しているかは検証が必要となる。

次に、Angkab (1972)では社会言語学的視点でバンコク方言の話し言葉における Pronominal Strategy が示されている。なお、当該研究は英語で記されているため、タイ語での各種語彙の記載はない。Pronouns 「代名詞」については、会話の中でのメッセージの送り手と受け手、言及されている対象者を示す語と定義されており、ここでの Pronouns 「代名詞」の意味範囲は人称表現の意味範囲と一致するものと考えられ、また Pronouns 「代名詞」を 11 のグループに分類している(表 2 参照)。

表 2 : Pronouns の分類⁶

	原文	例
(1)	Personal Pronouns Proper	【一人称】 chǎn、phôm、kuu、nũu、nii、ay、ʔàat-ta-maa 【二人称】 khun、kɛɛ、câw、nũu、yuu

		【三人称】 kháw、thâan、kɛɛ、man
(2)	Kin Terms	phôo 「父」、mêe 「母」
(3)	Pseudo Kin Terms	phîi 「兄/姉」、luŋ 「父方/母方の伯父」
(4)	Teknonymy Terms	ʔaa 「父方の叔父/叔母」 ⁷
(5)	Personal name	chûuu 「名前」、chûuu-lên 「ニックネーム」
(6)	Friendship Terms	phûuan 「友」、fɛɛn 「ファン」
(7)	Occupation Terms	ʔaa-caan 「先生」、mǎo 「医者」、pha-yaa-baan 「看護師」、mêe-kháa 「女性行商人」、cháaŋ 「職人」
(8)	Foreign Loan Words as Pronouns	ʔay 「I」、yuu 「you」、céc 「姉(中国語由来)」、hia 「兄(中国語由来)」
(9)	Titles as Pronouns	thâan、khun、câw、nǔu
(10)	Words and Phrases Specially Employed to Refer to Spouse	fɛɛn 「恋人」、thîi baan 「家で」
(11)	Special Vocabulary Used in Speaking to and by Monks	【一人称】 ʔaat-ta-maa 【二人称/三人称/呼びかけ】 lüaŋ-phîi、lüaŋ-phôo、lüaŋ-taa

表 2 中の(1)Personal Pronouns Proper は例として挙げられている語から鑑みるに、人称代名詞の意味範囲を示すものと捉えることが可能である。なお、本分類においては、複数のグループに属している語もいくつか見られる。例えば、(1)Personal Pronouns Proper と重複するものとして、英語由来のʔay「I (一人称)」は(8) Foreign Loan Words as Pronouns にも、僧侶が一人称表現として使用するʔaat-ta-maa は(11) Special Vocabulary Used in Speaking to and by Monks にも分類される形となっている他、(9)Titles as Pronouns に属する語は全て人称代名詞であり、(1)にも属するものとなる。

Navavan (2016)の分類と Angkab (1972)の分類を比較してみると、表 1 の(1)-2 kham bòok bu-rüt 「人称代名詞」に該当する範囲は、表 2 の(1)Personal Pronouns Proper とほぼ合致する⁸。そして、表 2 の(1)以外のものが、全て表 1 の(1)-1 kham naam 「名詞」に含まれているかと言えば、(6) Friendship Terms や(10) Words and Phrases Specially Employed to Refer to Spouse のように表 1 の中には想定されていない語彙グループもある。

このように人称代名詞の枠組み自体は両研究でともに見られるものの、代名詞代用表現としての明確な枠組みはなく、全て代名詞の一種としてみなされている可能性が高い。それ故、代名詞代用表現に相当する語もないものと考えられる。そこで、人称代名詞以外の語/句で話し手・聞き手を指示する語/句という意味範囲を明確に示す代名詞代用表現に相当するタイ語語彙として、kham theen bu-rüt sàp-pha-naam คำแทนบุรุษสรรพนาม を

提案したい。この語は、kham「語」+ theen「代用する」+ bu-rùt「人」+ sàp-pha-naam「代名詞」という要素から構成され、人称代名詞以外で話し手・聞き手を指示する語/句という代名詞代用表現の意味範囲をより適切に示すことが可能であると考えている。

2. 代名詞代用表現の特徴

Navavan (2016)は、表 1 中の(1)-1 kham naam「名詞」の特徴の1つとして一人称、二人称、三人称として使用可能であるが、各語単体では、どの人称かの識別不可能であるという点を挙げている。しかしながら、ここに含まれる語の中には使用可能な人称に制限があるものがある点については言及されていない。例えば、ʔaa-caan「(教職の)先生」は、代名詞代用表現として使用する場合、基本的には一人称としては使用せず、一人称では khruu「(教職の)先生」が用いられる他、phûu-càt-kaan「マネージャー」や nâk-rian「生徒」なども一人称として使用することはほとんどない。

表 1 中の(1)-2 kham bòok bu-rùt「人称代名詞」の機能的特徴としては、その語単体で性別、単数・複数、立場、そして態度を示すことができるのに対し、(1)-1 kham naam「名詞」ではそれらを示すことが出来ないとしている。しかしながら、(1)-1 kham naam「名詞」に分類されている語にも、それらの一部を示す意味機能を有しているものもある。例えば luŋ「父方/母方の伯父」といった親族名称・疑似親族名称を使用するのであれば対象が男性であることを既に示している。また、親族名称・疑似親族名称を使用することで対象者への親しさや敬意、職業名称を使用することで敬意といったように態度を示すことが可能という調査結果もある(スニサー2019a、2019b、2020、スニサー&富盛 印刷中)。

他の特徴として、人称代名詞を含む代名詞は機能的に本文の中で主語や目的語の機能を有しているとされていることから(Wichian 2014)、代名詞代用表現の生起する位置も本文での主語、目的語の位置に生起することとなる。また、形式については、Cooke (1965)の中で、(title)+kin term/given name/nickname/status term といった形式が示されているものの、筆者としては不十分と考えており、今後、より幅広く検証し、全体像を明らかにしていく必要がある。

II. タイ語での呼びかけ表現

次に、呼びかけ表現についても、前章の代名詞代用表現と同様、先行研究における関連する語彙の意味範囲や機能的・形式的特徴を考察していく。

1. 先行研究における関連語彙

呼びかけ表現については、1882-1982年の小説や短編小説を研究対象とした Kalaya & Amara (1986)が広範かつ詳細な考察を行っている。その中で、話し手が聞き手のことを呼びかける語/句のことを *kham riak khāan* (address term)と呼んでいる。*kham riak khāan* という語は、*kham* 「語」 + *riak* 「呼ぶ」 + *khāan* 「応答する」から構成されており、語の意味からすれば、呼びかけに応答する語も含まなくてはならないものの、Kalaya & Amara (1986)の研究範囲には呼びかけに応答する語は含まれていない。

一方、Navavan (2016)は、*kham riak khāan* を *kham riak* 「呼びかけ表現」と *kham khāan rāp* 「応答表現」の2つに細分化している。そして、*kham riak* 「呼びかけ表現」とは、注意を喚起するための語であり、聞き手を示す「人の名前」、「親族名称」、「役職名称」、「職業名称」、「二人称代名詞」が用いられる、との説明がされている。但し、ここでの *kham riak* には聞き手を示す「人の名前」、「親族名称」、「役職名称」、「職業名称」、「二人称代名詞」に加え、*nīi* 「これ」といった指示代名詞と *nāy* 「どれか」といった不定代名詞や *thōot ná? khráp/khá?* 「すみません」といった句も含まれており、呼びかけ表現が持つ聞き手を発話の伝達先として同定する機能という点では若干意味範囲が異なるものとなる。そこで、呼びかけ表現に相当するタイ語語彙としては *kham riak bük-khon* คำเรียกบุคคล とすることを提案したい。この語は、*kham* 「語」 + *riak* 「呼ぶ」 + *bük-khon* 「人物」という要素から構成されるため、聞き手を発話の伝達先として同定する語/句という呼びかけ表現の意味範囲を明確に示すことが可能であると考えている。

2. 呼びかけ表現の特徴

Navavan (2016)では、*kham riak* 「呼びかけ表現」の文法的な特徴として、本文からは独立している点を挙げている。つまり、*kham riak* 「呼びかけ表現」は、主語や目的語の役割を有していないということを意味しており、本文で主語や目的語の役割を有する代名詞代用表現と大きく異なる特徴となる。また、*cāa* など話し手の意図を表す機能を有

する語である *kham bòok maa-laa*、もしくは *kháp/khá?* など、話し手の性別や年代、話し手の態度や聞き手の立場を示す語である *kham bòok sa-thãa-ná-phâap* を *kham ríak* と合わせて使用する場合もある、とも述べられている。本稿では、*kham bòok maa-laa* と *kham bòok sa-thãa-ná-phâap* について述べられている意味機能から、便宜上これら 2 語を合わせて「終結小辞」と呼ぶこととする。そしてこれらの「終結小辞」も含む *kham ríak* 「呼びかけ表現」は文頭に生起することが多いが、文末に生起するケースもある、とも述べている。

Kalaya & Amara (1986) では *kham ríak khãan* 「呼びかけ表現」の形式について、詳細に分析がなされている。呼びかけ表現の基本形式は“A+(B)”となるが、表 3 で示した 6 グループが A として可能な構成要素として挙げられている。

表 3 : A の構成要素⁹

		原文中での英語	筆者訳
1	<i>sáp-pha-naam / kham nam-nâa naam</i>	---	代名詞 / タイトル
2	<i>kham ríak yâat</i>	kin term	親族名称
3	<i>yót</i>	rank	階級
4	<i>?aa-chiip / tam-nèj</i>	title	職業名称 / 役職名称
5	<i>chúuu</i>	name	名前
6	<i>wa-líi sa-dèej khwaam rúu-sùk</i>	---	感情表現

表 3 の 1~6 の中から、最少で 1 要素でもあれば呼びかけ表現として成立するとともに、最多で 6 要素が組み合わさった呼びかけ表現も可能としている。但し、1→2→3→4→5→6 の順番は固定しており、順序が入れ替わることはない、と述べている。しかしながら、全ての呼びかけ表現がこの順番の通りではないと考える。例えば、*?aa-caan* 「(教職の)先生」+*pâa* 「父方/母方の伯母」や *?aa-caan* 「(教職の)先生」+*phii* 「兄/姉」+名前といった言い方は、筆者の経験上、実際の対話で呼びかけ表現として使用されているが、表 3 での構成要素に当てはめると、「4+2」、及び「4+2+5」の順となるため、この形式に関しても現代のタイ語の談話データに基づき、再精査する必要がある。

また、表 3 中の 4. *?aa-chiip / tam-nèj* は、原文中に補足の英訳として title と表記されているが、これらのタイ語が表すものは事例を見ても「職業名称 / 役職名称」であり、仮に補足の英語であったとしても、title と表記してあると誤解を招く懸念がある。Cooke (1965) では、title の意味範囲として人称代名詞に加え kin term も含めるなど、他の研究

においても title「タイトル」の意味範囲が不明瞭なままに使用されるケースが散見されるため、呼びかけ表現及び代名詞代用表現関連ターミノロジーの1つとして title「タイトル」の意味範囲を明確にすることも提起したい。

Cooke (1965)では、名前の前に kin term が来るとそれを title とみなしているが、Kalaya & Amara (1986)が示した表3の考え方であれば 1. kham nam-nâa naam「タイトル」と 2. kham riak yâat (kin term)「親族名称」とは明確に分けることが可能となる。また、表3中で 1. sàp-pha-naam「代名詞」と 1. kham nam-nâa naam「タイトル」を同じグループとしているのは、sàp-pha-naam「代名詞」の中には kham nam-nâa naam「タイトル」として使用しているものがあるためである。具体的には、二人称の人称代名詞でもある khun や thâan であるが、それらは 2. kham riak yâat「親族名称」、4. ?aa-chîip / tam-nèj「職業名称/役職名称」、5. chûuu「名前」の前に付加され使用される。そして、kham nam-nâa naam は、kham「語」+nam-nâa「前に」+naam「名詞」という要素から構成され、名詞の前に来る語、といった意となる。さらに表3中の1~6の順番は入れ替わることはないとしており、1. kham nam-nâa naam は常に親族名称や名前などの他の名詞よりも先に生起するものであることから、kham nam-nâa naam を title「タイトル」に相当するタイ語の語彙と捉えるのは妥当であろう。但し、kham nam-nâa naam「タイトル」と sàp-pha-naam「代名詞」が指す範囲は全く同一ではないため、その点は明確に区別して使用する必要はあると考える。

一方、“A+(B)”のBに該当する語を kham loj tháay と呼び、具体例として cǎa や khráp/khá?などを示す他、Aの後に生起し、丁寧さや話し手と聞き手の親疎を示す機能を有している語としている。kham「語」+loj「入れる」+tháay「最後」といった要素から構成されるこの語は Navavan (2016)が使用する kham bòok maa-laa と kham bòok sa-thǎa-ná-phâap と呼び方は異なるものの、意味範囲はほぼ重複しており、kham loj tháay についても本稿では便宜上、同じく「終結小辞」と仮称することとする。この「終結小辞」の生起する位置や意味機能については筆者も同意するものの、括弧書き(B)が示す意図については疑義を示したい。Kalaya & Amara (1986)は「終結小辞」を“あってもなくてもよいもの”と位置付け、「終結小辞」=Bを括弧書きで示しているが、「終結小辞」は表示することが必要となるケースもある。例えば、以下に示した(例1-a)、(例1-b)は、秘書が学長へ会議資料を渡す際に使用する発話を想定したものである。(例1-a)は文法的には誤りではないが、ポライトネスの点から問題がある。秘書が?a-thí-kaan「学長

(短縮形) を呼びかけ表現として使用する場合は、高いレベルでの敬意を示すタイトル *thâan* を「学長」の前に付加するとともに、呼びかけ表現の後に手寧さを表す終結小辞 *khá?* (男性の場合は *khráp*) を付け加えた(例 1-b)の形で用いるのが一般的と考える。

(例 1-a)

<u>ʔa-thí-kaan</u>	<i>nîi</i>	<i>ʔèek-ka-sǎan</i>	<i>kaan-pra-chum</i>	<i>khâ?</i>
president.ADT	this	document	meeting	PTCL

「ʔa-thí-kaan、こちらが会議資料です。」

(例 1-b)

<u>thâan</u>	<u>ʔa-thí-kaan</u>	<u>khá?</u>	<i>nîi</i>	<i>ʔèek-ka-sǎan</i>	<i>kaan-pra-chum</i>	<i>khâ?</i>
TTL.HON	president.ADT	PTCL	this	document	meeting	PTCL

「thâan ʔa-thí-kaan khá?、こちらが会議資料です。」

Kalaya & Amara (1986) は、A の部分に焦点を当てており、呼びかけ表現としての B=「終結小辞」の意味機能については考察がなされていない。しかしながら、呼びかけ表現の終結小辞では多く語彙が使用されており、一例として(例 2)、(例 3)で示した通り、その意味機能も多様なため、今後、呼びかけ表現での各種終結小辞の意味・機能についての考察・分析も必要である。

(例 2)

<u>phôo</u>	<u>cǎa</u>
father.ADT	PTCL

「父親」の語の後に終結小辞 *cǎa* を付加した呼びかけ表現となるが、お願いをする場合などで使用される。*cǎa* を付け加えることで親しみや甘えのニュアンスを表すことが可能となる。

(例 3)

<u>khun</u>	<u>phîi</u>	<u>ná?</u>	<u>khun</u>	<u>phîi</u>
TTL.HON	elder sibling.	PTCL	TTL.HON	elder sibling.
	ADT			ADT

呼びかけ表現の後に終結小辞 *ná?* を付加すること、及び呼びかけ表現を繰り返し使用することで、不平不満などを示している¹⁰。

Kalaya & Amara (1986)が対象としたデータの中で確認された呼びかけ表現の A に該当する部分の組み合わせは 25 種類であり、それらをまとめたものが表 4 である。なお、「組み合わせ」欄で示されている番号は、表 3 での番号となる。

表 4：確認された呼びかけ表現 A の組み合わせ⁹

【1 要素】

No.	組み合わせ	例
1	1	khun 「二人称代名詞」、khun-naay 「奥様」
2	2	pâa 「父方/母方の伯母」、lâan 「孫/甥/姪」、lûuk 「子供」、cée 「姉(中国語由来)」
3	3	khun-yǐŋ 「首相夫人」、càa 「警察の一番下の職位」
4	4	?aa-caan 「(教職の)先生」、phûu-càt-kaan 「マネージャー」
5	5	chûuu-lên 「ニックネーム」、chûuu-ciŋ 「本名」
6	6	phûuan-rák 「愛すべき友」、thii-rák 「最愛の人」

【2 要素】

No.	組み合わせ	例
7	1+2	khun+?aa 「～さん+父方の叔父/叔母」、?ây+nóŋ 「男性のタイトル+弟/妹」
8	1+3	thâan+naay-phon 「～様+軍人の最高位職」、khun+càa 「～さん+警察の職位」
9	1+4	khun+mǔo 「～さん+医者」、thâan+naa-yók 「～様+首相」
10	1+5	nûu+yàŋ 「一/二人称代名詞+名前」、mêe+yéem 「女性のタイトル+名前」
11	1+6	khun+thii-rák 「～さん+最愛の人」、 ?ây+phûuan-yâak 「男性のタイトル+苦労を分かち合った友」
12	2+3	phii+khûn 「兄/姉+(昔の)公務員の職位」、phii+lüaŋ 「兄/姉+(昔の)公務員の職位」
13	2+4	luŋ+mǔo 「父方/母方の伯父+医者」、luŋ+phûu-yàŋ 「父方/母方の伯父+村長」、
14	2+5	phii+kriaŋ 「兄/姉+名前」、nóŋ+tûm 「弟/妹+名前」、lûuk+tûm 「子供+名前」
15	3+5	càa+wěeŋ 「警察の一番下の職位+名前」、mùat+daa-raa 「警察の職位+名前」
16	3+6	thâan-chaay+thuun-hûa-khóŋ-mêe 「男性王族の位+尊敬と愛情を表す表現」
17	4+5	phûu-kam-kàp+?it-sa-rà 「監督+名前」、thít+khiaŋ 「出家完了者+名前」
18	5+6	?ù-sâa+yóŋ-rák 「名前+最愛の人」、ku-lít+thii-nâa-sǔŋ-sâan 「名前+可哀そうな人」

【3 要素】

No.	組み合わせ	例
19	1+2+4	khun+pâa+?aa-caan 「～さん+父方/母方の伯母+(教職の)先生」
20	1+3+4	khun+phrá+pa-lât 「～さん+公務員の職位+副郡長」
21	1+3+5	khun+lüaŋ+phí-sit(+khá?) 「～さん+公務員の職位+名前(+終結小辞)」

22	1+4+5	thâan+ʔay-ya-kaan+sa-mĩŋ) 「～様+検事+名前」
23	1+5+6	mêe+nĩm+thĩi-rák 「女性のタイトル+名前+最愛の人」
24	2+5+6	phĩi+rát+khǒŋ-nóŋ 「兄/姉+名前+私(弟/妹)の」
25	3+5+6	yĩŋ+nóŋy+lãan-raw 「女性王族の位+名前+私の孫/甥/姪の」

表4で示された組み合わせや法則は、今後の研究のためにも非常に有益なものであるが、いくつか指摘、もしくは補足しておきたい点がある。まず3. yót (rank) 「階級」にある語が現在ではあまり使われない語が多いということである。No.12の例にある公務員の職位である khũn や lǔaŋ、No.16の thâan-chaay「男性王族の位」、No.25の yĩŋ「女性王族の位」といった語は、今ではほとんど使われておらず、現在でも一般的に使用されているものは警察官の職位となる càa や mùat などとなり、実質的には4. tam-nèŋ「役職名称」と3. yót (rank) 「階級」の意味範囲が重なってきているのではと思われる。また、No. 10やNo.13に登場する mêe「母」は2. kham riak yâat (kin term) 「親族名称」ではなく、1. sàp-pha-naam / kham nam-nâa naam「代名詞 / タイトル」としての扱いとなっている。これはタイ学士院辞書(The Royal Institute Dictionary2011:922)にも記されている用法であるが、mêeは「母」という本来の意味から離れ、親しみや愛情を込めて年下の女性への呼びかけ表現のタイトルとして使用されるとあり、疑似も含めた親族関係とは離れた形で親族名称が使用されることがある。他にも yaay「母方の祖母」は親しみを込めて同レベルや年下の相手にタイトルとして使われることもある。疑似も含む親族名称とタイトルとして使用される親族名称の判別はコンテキストがないと難しいケースもあるかと思われる。

また、この25パターンの中で、使用頻度が高い組み合わせはNo.1[1.代名詞/タイトル]、No.10[1.代名詞/タイトル+5.名前]、No. 5[5.名前]という結果であったという定量的分析とともに、呼びかけ表現が持つ敬意と親疎の調整機能に関する考察も示している。具体的には[5.名前]を含む呼びかけ表現の方が[1.代名詞/タイトル]だけのものより、親しきが増加し、逆に敬意は減るとしている。しかしながら、筆者としては[1.代名詞/タイトル]と[1.代名詞/タイトル+5.名前]での敬意レベルの差については、少々疑問に思う点もある。名前を付加するからといって、敬意のレベルが低減していない印象である。Kalaya & Amara (1986)の分析対象は、1882-1982年の小説や短編小説であるため、時代の変化による影響の可能性もある。他にも、前述の通り、yót (rank) 「階級」にある語が現在ではあまり使われない語が多いということもあるため、今後、現代のタイ語のデータをベースに精査していきたいと考えている。

そして、Kalaya & Amara (1986)では、呼びかけ表現が生起する位置については、話し

手が聞き手に命題内容を述べる前と説明されているが、これは呼びかけ表現は文頭だけでなく、文末にも生じるケースもあるとしている前述の Navavan (2016) と見解が異なる。この相違はタイ語での呼びかけ表現の意味範囲が不明瞭なことに起因するためと考える。Navavan (2016) は *kham riak* 「呼びかけ表現」の役割について、対象者の注意を喚起するために使用する機能に加え、会話の中で対話者の注意を再度引き付ける機能という2つの機能があるものと捉えているが、本稿では前者を注意喚起機能、後者を再喚起機能と仮称する。注意喚起機能としての呼びかけ表現は文頭によく使用され、再喚起機能の場合は文の最後や文と文の間によく生起されるものとしている。この点に鑑みるに、Kalaya & Amara (1986) は、*kham riak khään* 「呼びかけ表現」を注意喚起機能のみでの意味範囲として捉えていることになる。

このように研究者によって機能的特徴にも差異が見られるため、本稿にて呼びかけ表現に相当するタイ語語彙として提案する *kham riak bùk-khon* の機能的範囲は、注意喚起機能と再喚起機能の両方を含むべきか否かも定義付けたい。その検証のため以下に(例4)、(例5)を提示する。

(例4)

<u>lûuk</u>	<u>cǎa</u>	lûuk	yàa	kuan	mêe	sì?	<u>lûuk</u>
child.ADT	PTCL	child.	do not	disturb	mother.OBJ	PTCL	child.ADT
							SBJ.PRNSB

「lûuk cǎa、(あなた=lûuk は) お母さんの邪魔をしてはいけませんよ、lûuk。」

「子ども」を意味する呼びかけ表現 *lûuk* が含まれた文となるが、文頭に終結小辞も含む形で *lûuk cǎa*、加えて文末に *lûuk* と文頭と文末に呼びかけ表現が生起している。なお、文中の2番目の *lûuk* は本文の主語となる。

(例5)

<u>khun</u>	<u>kháp</u>	<u>khun</u>	còot	rót	troŋ-níi	mây	dâay	ná?
you.	PTCL	you.	park.	car.	here	not	can	PTCL
2.PRN.ADT		2.PRN.ADT	TR	OBJ				

「khun kháp、khun、ここに車は駐車できませんよ。」

文頭に二人称代名詞となる *khun* と終結小辞 *kháp* が共起した呼びかけ表現に続き、*khun* が使用され、呼びかけ表現が2回続けて生起している文となる。なお、ここでは主

語となる語が *khun* ということが文脈から明らかであるため、非表示とされている¹¹。

(例 4)、(例 5)ともタイ語としては極めて自然な文であり、タイ語ではこのように 1 回の発話行為の中で呼びかけ表現を複数回使用すること、特に文頭だけでなく、文末や文中に使用することはタイ語を母国語とする筆者の経験上、極めて日常的に行われている行為と捉えている。そのため、文頭に生起するとされる注意喚起機能に限定し、タイ語での呼びかけ表現の調査・考察を進めるのは不完全と言わざるを得ず、前節で新たに提案した呼びかけ表現に相当するタイ語語彙 *kham riak bük-khon* の機能的範囲としては、注意喚起機能と再喚起機能の両方を含むものとした。注意喚起機能として用いる場合は、聞き手が話し手に気付いていない状況で使用されるため、文頭でよく使用される。一方、再喚起機能の場合は、既に聞き手が話し手に注意を向けている状況で、話し手がその注意を維持・強化するために使用されるため、生起位置が比較的自由であり、文の最後や文と文の間によく生起する。

III. 人称表現の使用意識調査からの考察

タイ語において人称表現や呼びかけ表現はコミュニケーションの上で重要なツールであるため、それらをより効果的にタイ語教育に織り込むことを目的として、筆者は 2018 年にタイ語を母語とする 580 名を対象に人称表現、呼びかけ表現に関するアンケート調査(内 34 名にはインタビューでの補完調査)を実施し、人称表現毎に調査結果の分析と考察を行っている(スニサー 2019a、2019b、2020、スニサー&富盛 印刷中)。本調査で用いた調査票での質問項目は、フォーマル及びカジュアルな場面において、年齢、性別、距離感、社会的立場などが異なる多様なタイプの対話者に対して自身が使用する一人称表現、二人称表現、呼びかけ表現について、そして三人称表現については同様に多様なタイプの第三者を言及する際に、自身が使用する三人称表現を選択し回答する方式とした。調査票で提示した回答の選択肢としては、Navavan (2016)を含めた 6 種類のタイ語教材¹²の中で人称表現、呼びかけ表現として掲載してある語を中心に選定し、さらに筆者の経験に基づき実際の会話で人称表現として耳にする機会のある語を選定・追加するとともに、「その他(要記入)」、「使わない」も選択肢として提示した。本調査は 580 名のタイ語母語話者を対象とした調査であり、現在のタイ語話しことばに見られる代名

詞代用表現や呼びかけ表現に関する特徴を観察する点で有効なリソースとなると考える。

本調査結果から、代名詞代用表現や呼びかけ表現に関連する内容で観察できた点として、まずどの人称表現においても、人称代名詞よりも親族名称や職業名称を使用するケースが多く、かつ提示した選択肢以外の「その他」の回答に多種多様な代名詞代用表現の回答があったということである。これまで疑似親族名称で母方と父方の親族で言い方が異なる場合は、*náa*「母方の叔父/叔母」、*taa*「母方の祖父」、*yaay*「母方の祖母」といった母方のものを使用するとされていたが(Amara 1981)、調査結果では *pùu*「父方の祖父」、*yâa*「父方の祖母」、*?aa*「父方の叔父/叔母」を特に一人称表現で使用するという回答も見られた。

phûu-càt-kaan「マネージャー」や *hǔa-nâa*「上司」といった役職名称は、二人称表現や三人称表現では使用されるものの、一人称表現としては使用しないという傾向が見られるなど、役職名称全体での用法を一律に論じることは難しく、個別に分析を行っていく必要があるだろう。なお、役職名称や職業名称については、この調査で現れているものは限定された語のみであるため、多様な職業名称や役職名称において各語毎にその用法の特性を観察し、全体的な傾向も明らかにしていく必要があるとも考えている。

また、現代では短縮した表現が好まれ、かつ許容されているという可能性を示唆する点もいくつか観察できた。*?aa-caan*「(教職の)先生」を短縮した *caan*、*phûu-?am-nuay-kaan*「役員レベルの役職名称」の頭文字を取った *phǒo-?oo*、*rooŋ-?a-thí-kaan*「副学長」の中で「副」を意味する *rooŋ* だけを使用するという回答は、相手と対面する状況である二人称表現の中でも見られた。他にも *naaŋ*「既婚女性の名前の前に付けるタイトル」、*?ii*「女性の名前の前に付けるタイトル」は基本的には名前とともに用いるものであるが、名前を付けずに各語単体で使用するという回答もあり、より短い表現が好まれていることが伺える。また、Kalaya & Amara (1986)では、最大 6 要素から成る呼びかけ表現が可能であり、彼女たちの調査結果では 3 要素まで見られたが、この意識調査見られた組み合わせは、最大 2 要素であった。

タイ語社会では、本名の他に、親などが生まれた時に命名し、原則一生続ける *chûuu-lên*「ニックネーム」がある。ニックネームはタイ語社会に深く根差しており、フォーマルな場面・関係においても一般的に用いられるほど汎用性が高く、カジュアルな関係では本名を知らず、ニックネームしか知らない場合も多い。ニックネームは本名と

ともに、先行研究や教材の中で、人称表現及び呼びかけ表現の1つとして扱われているが、ニックネームとは異なる **chǎa-yaa** 「愛称/alias」を使用するという回答も、特に三人称の中で観察できた。タイ語での **chǎa-yaa** 「愛称/alias」は、その人物の特徴を捉えた表現が用いられ、ニックネームとは異なり、使用する話者や場面も限られたものとなる。

多くの先行研究でも言及されているが、仏教の僧侶を表す語については、様々な代名詞代用表現や組み合わせが見られた。その中でも多くの組み合わせに含まれていたのは、親族名称である。バンコク方言と思われる語だけでも、**lǔaŋ+pùu** 「父方の祖父」/**taa** 「母方の祖父」/**phôo** 「父」/**luŋ** 「父方/母方の伯父」/**náa** 「母方の叔父(/叔母)」/**?aa** 「父方の叔父(/叔母)」、**phii** 「兄(/姉)」といった語が確認され、父方の親族名称の使用も含め非常に多様性に富んでいる。現在では主に仏教僧侶に使用するタイトル **lǔaŋ**¹³を付加し、僧侶と自身の年齢差に応じて疑似親族名称を使用していると思われるが、祖父の年代層、父や父の兄弟の年代層が対象となる場合、どういったメカニズムに基づき使用する疑似親族名称を選択しているかは不明で、興味深い点でもある。

他にも元来「それ」を意味する指示代名詞である **man** は、特に三人称として使用されており、今では教材などでも人称代名詞として扱われているというケースもあるが、同じく指示代名詞である **nii** 「これ」はまだ社会通念的には人称表現として許容されている状況ではないと筆者は捉えているものの、**nii** を一人称として使用するという回答もあった。

そして、本調査結果に基づき、タイ語での人称表現や呼びかけ表現の選択においては、発話者と各語が指示する人物との年齢差や社会的立場といった縦の関係(垂直的ポライトネス)と親疎による横の関係(水平的ポライトネス)の二軸構造によって、使用する語を決定する仕組みとなっていることが明らかとなり、一人称表現、呼びかけ表現を含む二人称表現においては特に発話者と対象者との年齢差が大きな影響を持つと指摘している(スニサー&富盛 印刷中)。そのため、例えばレストランにおける店員への呼びかけ表現としては、疑似親族名称 **phii** 「兄/姉」、**nóoŋ** 「弟/妹」がよく用いられる一方で、年齢差が呼びかけ表現の選択に大きな影響を有している故、逆に年齢差が不明瞭なケースでは年齢差を表すこれらの語は避けられ、**thòot ná? khráp/khâ?** 「すみません」といった句を、店員を呼ぶために用いている。または、同年代程度と思われる相手の場合は年上へ使用する表現、つまりは敬意を示す表現となる疑似親族名称 **phii** 「兄/姉」を使用することで、円滑なコミュニケーションを試みている傾向が確認できた(スニサー2019b)。

IV. まとめと今後の展望

本稿で見てきたタイ語での代名詞代用表現と呼びかけ表現に関連するターミノロジーの意味範囲、及びそれぞれの特徴について、本章で総括するとともに今後の展望について述べる。

1. まとめ

「代名詞代用」、「呼びかけ」は、言語形式の形態統語的分類、すなわち品詞・統語範疇ではなく、言語形式が担う意味の範疇、すなわち用法・機能である。修飾という用法が名詞句、形容詞句、動詞句、側置詞句などさまざまな統語範疇に存在するのと同様に、代名詞代用・呼びかけもさまざまな統語範疇により実現され得る。ゆえに、代名詞代用表現・呼びかけ表現の記述の主要な目標の一つは、それらの用法がどのような統語範疇に存在するかを明らかにすることである(野元他 印刷中)。その前提の下、「代名詞代用表現」に相当するタイ語語彙として *kham theen bu-rùt sàp-pha-naam* คำแทนบุรุษสรรพนาม を提案する。*kham theen bu-rùt sàp-pha-naam* は本文中で主語や目的語の機能を有しているため、生起する位置も本文での主語、目的語の位置となる。*kham theen bu-rùt sàp-pha-naam* 総体としては一人称、呼びかけ表現を含む二人称、及び三人称で使用可能であるが、語彙によっては、使用することが適切ではない人称があるとともに、*kham theen bu-rùt sàp-pha-naam* 単体では、どの人称として使用されているかは判別が難しいことが多い。また、一部の語については、単体で性別や立場、態度を示すことが可能なものもある。この用法で使用される語には、確認出来ているものとして、疑似関係を含む親族名称、テクノニミー、職業名称、役職名称、名前(本名、ニックネーム、愛称)、友情を示す表現、配偶者用の婉曲表現、仏教僧侶を示す表現などがある他、現代の話しことばでは、より短い表現が好まれ、許容されている傾向が見られる。

次に聞き手を発話の伝達先として同定する用法・機能となる「呼びかけ表現」に相当するタイ語語彙としては、*kham riak bùk-khon* คำเรียกบุคคล を提案する。*kham riak bùk-khon* は、対象者の注意を喚起するために使用する(注意喚起機能)とともに、会話の中で対話者の注意を再度引き付ける(再喚起機能)ために用いられる語/句であり、文法的には主語や目的語の役割を有しておらず、本文からは独立したものとなる。形式としては A+(B)となり、A は 1. *sàp-pha-naam/kham nam-nâa naam* 「代名詞/タイトル」→2. *kham*

riak yàat 「親族名称」 → 3. yót 「階級」 → 4. ?aa-chiip / tam-nèj 「職業名称/役職名称」 → 5. chûuu 「名前」 → 6. wa-lii sa-dæŋ khwaam rúu-sùk 「感情表現」の順で最少 1 要素から最多で 6 要素から成る組み合わせで構成されるが、異なる順番も既に確認されており、更なる検証は必要である。検証を行う際は、3. yót 「階級」と 4. ?aa-chiip / tam-nèj 「職業名称/役職名称」のグループとしての統合の可能性についても探っていきたい。B は終結小辞を意味するが、表示されないケースもある。生起する位置については、注意喚起機能の場合は文頭に生じることが多いが、再喚起機能の場合は文末及び文と文の間にも生じる。呼びかけ語で同定する対象者と発話者の年齢差が不明な場合、疑似親族名称は使用しない傾向がある。

また、kham theen bu-rùt sàp-pha-naam 「代名詞代用表現」と kham riak bùk-khon 「呼びかけ表現」に共通し、親族名称や職業名称/役職名称、名前などの名詞の前に付加され使用される khun や thâan といった語を kham nam-nâa naam 「タイトル」と呼ぶことも合わせて提案したい。

2. 今後の展望

今後、タイ語の代名詞代用表現と呼びかけ表現の特徴をより明らかにしていくためには次に挙げる点での検証が必要であろう。

まず呼びかけ表現の一部を構成する終結小辞に関する意味機能の分析である。呼びかけ表現の中で用いられる終結小辞各語が持つ意味を観察するとともに、ともに使用することが可能な代名詞代用表現や人称代名詞との共起パターンも検証することが有用と考える。

また、代名詞代用表現及び呼びかけ表現で、多用される職業名称、役職名称、親族名称についても更なる分析が必要である。本稿で示してきた通り、職業名称や役職名称は単体で代名詞代用表現と呼びかけ表現の両方で使用できるもの、タイトルを付加することで呼びかけ表現として使用できるものがあるが、両方で使えない語もある可能性もある。また、代名詞代用表現として使用可能な語の中でも使用できる人称に制限があるものもあるため、可能な限りの職業名称や役職名称の分類を行うとともに、その法則性や傾向についても明らかにしていきたい。現代では bós 「ボス」など、英語由来で代名詞代用表現や呼びかけ表現として使用されている語彙も増えてきているため、対象とする職業名称や役職名称としての基準作りも求められるであろう。他にも、これまで父方と

母方で親族名称が異なる場合、母方のものを使うと言われてきたが、父方のものを使う事例もあるため、父方の親族名称が出現するケースを観察していきたい。

代名詞代用表現と呼びかけ表現を構成する語彙グループについては、既に複数の研究者により検証がなされているものの、これまで挙げられてきたもので過不足ないかは更なる検証が求められる。例えば、以下の(例7)は「そこの2人!」と注意を促す意味の文であるが、このケースでは数詞 *sǒŋ* 「2」、類別詞 *khon* 「人」、指示詞 *nán* 「そこの」の組み合わせによって、注意喚起しつつ、聞き手を発話の伝達先として同定する呼びかけ表現の機能を有している。今回参照した先行研究では、この要素から成るパターンは呼びかけ表現としての対象とはなっていなかったため今後、分析対象に含めるべきか検証したい。

(例7)

sǒŋ khon nán nâ?
2.ADT person.CLF.ADT that.ADT PTCL

「そこの2人!」

また、タイ語は意味・統語上の必須項の省略を許す Pro Drop 言語であり、文脈により主語あるいは目的語を省略することが可能であるため(峰岸&スニサー2019)、ゼロ代名詞が発生する条件や環境も考察していく必要がある。一例として、Cooke (1968)は、(例8)のように呼びかけ表現の後の二人称表現は頻繁に省略されると述べているが、より多様ケースを観察していく必要があると考えている。

(例8)

khun bun-lian kháp pay nǎy maa
TTL.HON Boonliang.PSN PTCL go where come

「Boonliang さん、どこへ行ってきたの?」

そして、分析範囲という側面では、これまでは話しことばデータを対象とした研究はあまり見られなかったため、今後は話しことばコーパスを活用するなど、現代の話しことばを対象とした分析も行っていきたい。その際、登場する人物や場面が固定したコーパスデータでは、使用される語彙も限定される懸念もあるため、より広範に事象を観察

するための検証方法も考慮していくことが求められる。

今後、これらの点の分析・検証を通し、タイ語で代名詞代用語・呼びかけ表現となり得る語彙や共起パターンとともに、それらの機能的特徴を明らかにしていくことで、工学的応用研究・開発や言語教育など多方面の領域に資する言語資源の構築へつなげていくことを目指していきたい。

注

- ¹ 本研究は JSPS 科研費 JP18H00686、JP17H02331、JP20H01255 の助成を受けたものである。
- ² khruu 「(教職の)先生」や mǎo 「医師」の前に敬称としてのタイトル khun を付加しても用いられる。
- ³ 怒りを示す場合や丁寧さを欠く表現として、呼びかけ表現でも khun を付加しないケースもある。
- ⁴ 意図的に距離を置こうとする場合や皮肉を込めた場合などで、稀に khun を付加するケースもある。
- ⁵ 表 1 は Navavan (2016) の記述内容に基づき、筆者にて表形式で示したものの。
- ⁶ 表 2 は Angkab (1972) の記述内容に基づき、筆者にて表形式で示したものの。
- ⁷ 父親が子供目線で自身の妹のことを ?aa 「叔母」と呼ぶ。
- ⁸ Angkab (1972) は指示代名詞 nīi を人称代名詞に含めているが、Navavan (2016) は含めていない。
- ⁹ 表 3、表 4 は、Kalaya & Amara (1986) の記述内容に基づき、筆者にて表形式で示したものの。
- ¹⁰ 同一文は独り言の文としても成立する。
- ¹¹ 文中の 2 番目の khun と rót の間に間を取らなければ、2 番目の khun を主語と解釈することも可能である。
- ¹² ①“Thai reference grammar : the structure of spoken Thai (Higbie & Thinsan 2003)”、②“A Reference Grammar of Thai (Iwasaki & Ingkaphirom 2009)”、③『タイ語の基礎 増補新版 (三上 2014)』、④『表現を身につける初級タイ語(スニサー2016)』、⑤『タイ語 (世界の言語シリーズ) (マラシー、村上 2014)』、⑥“way-yaa-koon thay (Navavan 2016)”
- ¹³ かつては公務員のタイトルとしても使用されていたが、現代では公務員を対象としては使用されない。

略語リスト

2	二人称	second person	PRNSB	代名詞代用表現	pronoun substitute
ADT	呼びかけ表現	address term	PSN	人名	person name
CLF	類別詞	claassifier	PTCL	小辞	particle
HON	敬称	honorific	SBJ	主語	subject
NUM	数辞	numeral	TR	他動詞	transtive
OBJ	目的語	object	TTL	タイトル	title
PRN	人称代名詞	personal pronoun			

参考文献

- スニサー ウィッタヤーパンヤーノン. 2017. 「タイ語話し言葉コーパスから見た「語用論的終結小辞」」『アジア・アフリカ言語文化研究 94 号』 pp.111-136
- スニサー ウィッタヤーパンヤーノン. 2019a. 「タイ語での一人称表現の使用意識とタイ語教育への活用」『外国語教育研究 外国語教育学会紀要 22 号』 pp.99-117
- スニサー ウィッタヤーパンヤーノン. 2019b. 「タイ語での二人称表現の使用意識とタイ語教育の課題」『東京外国語大学論集 99 号』 pp. 173-191
- スニサー ウィッタヤーパンヤーノン. 2020. 「タイ語での三人称表現の使用意識とタイ語教育の課題」『東京外国語大学論集 100 号』 pp. 269 -285
- スニサー ウィッタヤーパンヤーノン、富盛 伸夫. 印刷中. 「タイ語教育における社会的文化的適切性と CEFR への適用 —ポライトネス理論の視点から見た人称詞・呼称表現を中心に—」『外国語教育研究 外国語教育学会紀要 23 号』
- 野元 裕樹、スニサー ウィッタヤーパンヤーノン (齋藤)、岡野 賢二、トゥザ ライン、南 潤珍、スリ・ブディ・レスタリ. 印刷中. 「代名詞代用・呼びかけ表現研究の現状—タイ語、ビルマ語、インドネシア語、ジャワ語、朝鮮語 —」東京外国語大学語学研究所『語学研究所論集 25 号』
- 峰岸真琴、スニサー・ウィッタヤーパンヤーノン. 2019. 「タイ語の主題とその談話での現れ方について」『言語の類型的特徴対照研究会論集 2 号』 pp. 111-135
- Bandhumedha, Navavan. 2016. “ไวยากรณ์ไทย way-yaa-koon thay” Bangkok: Chulalongkorn University.
- Cooke, Joseph R. 1968. “Pronominal Reference in Thai, Burmese, and Vietnames.” Berkeley : University of California Press.
- Iwasaki, Shoichi & Ingkaphirom, Preeya. 2009. “A Reference Grammar of Thai.” Cambridge: Cambridge University Press.
- Ketpratum, Wichian. 2014. “หลักภาษาไทย làk-phaa-săa thay.” Nonthaburi: Phoemsap Printing
- McCready, Elin. 2019. “The Semantics and Pragmatics of Honorification: Register and Social Meaning.” Oxford: Oxford University Press.
- M.R.Kalaya, Tingsabadh & Amara, Prasithratsint. 1986. “The Use of Address Terms in Thai during the Ratanakosin Period.” Bangkok: Chulalongkorn University Press.

- Palakornkul, Angkab. 1972. "A Socio-Linguistic Study of Pronominal Strategy in Spoken Bangkok Thai." University Microfilms International.
- Prasithrathsint, Amara. 1981. "Some Significant Socio-cultural Characteristics as Evidenced in the Use of Kinship Terms in Thai Term Paper." *Linguistics* 414. University of Hawaii.
- Ratitamkul, Theeraporn & Uehara, Satoshi. 2012. "Chapter 8 : A contrastive case study of pronominal forms in English, Japanese and Thai: A parallel corpus approach." *Typological Studies on Languages in Thailand and Japan (Hituzi Linguistics in English No.19)*. Tokyo: Hituzi Syobo Publishing: pp.137-158
- "The Royal Institute Dictionary พจนานุกรม ฉบับราชบัณฑิตยสถาน" 2011. Bangkok: Royal Society of Thailand